

[A年] 聖霊降臨節第3主日(2021年6月6日)**【旧約聖書日課】エゼキエル書 18章25～32節**

²⁵それなのにお前たちは、『主の道は正しくない』と言う。聞け、イスラエルの家よ。わたしの道が正しくないのか。正しくないのは、お前たちの道ではないのか。²⁶正しい人がその正しさから離れて不正を行い、そのゆえに死ぬなら、それは彼が行った不正のゆえに死ぬのである。²⁷しかし、悪人が自分の行った悪から離れて正義と恵みの業を行なうなら、彼は自分の命を救うことができる。²⁸彼は悔い改めて、自分の行ったすべての背きから離れたのだから、必ず生きる。死ぬことはない。²⁹それなのにイスラエルの家は、『主の道は正しくない』と言う。イスラエルの家よ、わたしの道が正しくないのか。正しくないのは、お前たちの道ではないのか。

³⁰それゆえ、イスラエルの家よ。わたしはお前たちひとりひとりをその道に従って裁く、と主なる神は言われる。悔い改めて、お前たちのすべての背きから立ち帰れ。罪がお前たちをつまずかせないようにせよ。³¹お前たちが犯したあらゆる背きを投げ捨てて、新しい心と新しい霊を造り出せ。イスラエルの家よ、どうしてお前たちは死んでよいだろうか。³²わたしはだれの死をも喜ばない。お前たちは立ち帰って、生きよ」と主なる神は言われる。

【使徒書日課】使徒言行録 17章22～34節

²²パウロは、アレオパゴスの真ん中に立って言った。「アテネの皆さん、あらゆる点においてあなたがたが信仰のあつい方であることを、わたしは認めます。²³道を歩きながら、あなたがたが拝むいろいろなものを見てみると、『知られざる神に』と刻まれている祭壇さえ見つけたからです。それで、あなたがたが知らずに拝んでいるもの、それをわたしはお知らせしましょう。²⁴世界とその中の万物とを造られた神が、その方です。この神は天地の主ですから、手で造った神殿などにはお住みになりません。²⁵また、何か足りないことでもあるかのように、人の手によって仕えてもらう必要もありません。すべての人に命と息と、その他す

べてのものを与えてくださるのは、この神だからです。²⁶神は、一人の人からすべての民族を造り出して、地上の至るところに住ませ、季節を決め、彼らの居住地の境界をお決めになりました。²⁷これは、人に神を求めさせるためであり、また、彼らが探し求めさえすれば、神を見いだすことができるようにということなのです。実際、神はわたしたち一人一人から遠く離れてはおられません。

²⁸皆さんのうちのある詩人たちも、

『我らは神の中に生き、動き、存在する』

『我らもその子孫である』と、

言っているとおりです。²⁹わたしたちは神の子孫なので、神である方を、人間の技や考えで造った金、銀、石などの像と同じものと考えてはなりません。³⁰さて、神はこのような無知な時代を、大目に見てくださいましたが、今はどこにいる人でも皆悔い改めるようにと、命じておられます。

³¹それは、先にお選びになった一人の方によって、この世を正しく裁く日をお決めになったからです。神はこの方を死者の中から復活させて、すべての人にそのことの実証をお与えになったのです。」

³²死者の復活ということを知ると、ある者はあざ笑い、ある者は、「それについては、いずれまた聞かせてもらうことにしよう」と言った。³³それで、パウロはその場を立ち去った。³⁴しかし、彼について行って信仰に入った者も、何人かいた。その中にはアレオパゴスの議員ディオニシオ、またグラムリスという婦人やその他の人々もいた。

【福音書日課】マタイによる福音書 3章1～6節

¹そのころ、洗礼者ヨハネが現れて、ユダヤの荒れ野で宣べ伝え、²「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言った。³これは預言者イザヤによってこう言われている人である。

『荒れ野で叫ぶ者の声がする。』

『主の道を整え、』

その道筋をまっすぐにせよ。』」

⁴ヨハネは、らくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べ物としていた。⁵そこで、エルサレムとユダヤ全土から、また、ヨルダン川沿いの地方一帯から、人々がヨハネのもとに来て、⁶罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた。

「聖書協会共同訳」(2018年版) 読み比べ

エゼキエル書 18章25～32節

²⁵しかしあなたがたは、『主の道は公正ではない』と言う。イスラエルの家よ、よく聞きなさい。私の道は公正ではないか。公正でないのは、あなたがたの道ではないのか。²⁶正しき者が正義に背を向け、不正を行い、そのために死ぬなら、彼は自分の行った不正によって死ぬ。²⁷しかし、悪しき者が自分の行った悪に背を向け、公正と正義を行うなら、彼は自分の命を救う。²⁸彼は顧みて、自分の行ったあらゆる背きから立ち帰ったのだから、必ず生きる。死ぬことはない。²⁹しかし、イスラエルの家は、『主の道は公正ではない』と言う。イスラエルの家よ、私の道は公正ではないのか。公正でないのはあなたがたの道ではないのか。

³⁰それゆえ、イスラエルの家よ。私はあなたがたをそれぞれの道に従って裁く——主なる神の仰せ。立ち帰れ。すべての背きから立ち帰れ。そうすれば過ちはあなたがたのつまずきとはならない。³¹あなたがたが私に対して行ったすべての背きを投げ捨て、自ら新しい心と新しい霊を造り出せ。イスラエルの家よ、どうしてあなたがたは死のうとするのか。³²私は誰の死をも喜ばない。立ち帰って、生きよ——主なる神の仰せ。

使徒言行録 17章22～34節

²²パウロは、アレオパゴスの真ん中に立って言った。「アテネの皆さん、あなたがたがあらゆる点で信仰のあついでであることを、私は認めます。²³道を歩きながら、あなたがたが拝むいろいろなものを見てみると、『知られざる神に』と刻まれている祭壇さえ見つけたからです。それで、あなたがたが知らずに拝んでいるもの、それを私はお知らせしましょう。²⁴世界とその中の万物とを造られた神が、その方です。この神は天地の主ですから、人の手で造った神殿などにはお住みになりません。²⁵また、何か足りないことでもあるかのよう、人の手によって仕えてもらう必要もありません。すべての人に命と息と万物とを与えてくださるのは、この神だからです。²⁶神は、一人の人が

らすべての民族を造り出して、地上の全域に住ませ、季節を定め、その居住地の境界をお決めになりました。²⁷これは、人に神を求めさせるためであり、また、彼らが探し求めさえすれば、神を見いだすことができるようにということなのです。実際、神は私たち一人一人から遠く離れてはられません。²⁸私たちは神の中に生き、動き、存在しているからです〔別訳→『我らは神の中に生き、動き、存在する』からです〕。皆さんのうちのある詩人たちも、『我らもその子孫である』と言っているとおりで。す。²⁹私たちは神の子孫なので、神である方を、人間の技や考えで刻んだ金、銀、石などの像と同じものと考えてはなりません。³⁰さて、神はこのような無知な時代を大目に見てくださいましたが、今はどこにいる人でも皆悔い改めるようにと、命じておられます。³¹先にお選びになった一人の方によって、この世界を正しく裁く日をお決めになったからです。神はこの方を死者の中から復活させて、すべての人にそのことの実証をお与えになったのです。〕

³²死者の復活ということを知ると、ある者は嘲笑い、ある者は、「それについては、いずれまた聞かせてもらうことにしよう」と言った。³³それで、パウロはその場を立ち去った。³⁴しかし、彼について行って信仰に入った者も、何人かいた。その中にはアレオパゴスの議員ディオニシオ、またダマリリスという女やその他の人々もいた。

マタイによる福音書 3章1～6節

¹その頃、洗礼者ヨハネが現れて、ユダヤの荒野で宣べ伝えて、²言った。「悔い改めよ。天の国は近づいた。」³預言者イザヤによって、

「荒野で叫ぶ者の声がする。

『主の道を整え、

その道筋をまっすぐにせよ。』」

と言われたのは、この人のことである。

⁴ヨハネは、らくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、ばったと野蜜を食べ物としていた。⁵すると、エルサレムとユダヤ全土から、また、ヨルダン川沿いの地方一帯から、人々がヨハネのもとに来て、⁶罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた。

黙想のためのノート**次主日聖書日課について**

・6月6日「聖霊降臨節第3主日」の日課主題は「悔い改めの使信」。日本基督教団の「新しい教会暦」で「聖霊降臨節」は「聖霊降臨日(ペンテコステ)」から始まるように数えるため、「聖霊降臨節」の呼称を充てるのはこの日が最初であるが「第3主日」となる。典礼色は、「聖霊降臨節」を通して「ペンテコステ」の「赤」を用いる提案もされているが、伝統的な使用法に従って、「ペンテコステ」を「赤」、「三位一体主日」を「白」、「聖霊降臨節第3主日」以降の「聖霊降臨節」を「緑」としている。「緑」は「自然色」として定められてきたもので、主の御業を記念する「待降節」、「降誕日～降誕節～公現節」、「受難節」、「復活日～復活節」、「聖霊降臨日」、「三位一体主日」を除く時期に充てられる。

旧約日課(エゼキエル 18章より)

・「エゼキエル書」は、三大預言書の一つ。「預言者エゼキエル」は、南王国末期、バビロニアによる支配と捕囚が始まった時期(前597年頃)に祭司である父親と共にバビロンに移住させられた後、同地で祭司任職を受けると共に「預言者」としての活動を始めた預言者で、その活動はエルサレム陥落・南王国滅亡(前587年頃)以後の捕囚が本格的に進められた時期まで続いたと考えられる。この活動時期は、「エレミヤ書」の「預言者エレミヤ」と重なる部分があるが、エレミヤはエルサレム陥落までもっぱらエルサレムで活動し、陥落後はエジプト避難民に連行されたときとされるので、両預言者の直接的な交流はなかったと考えられる。にもかかわらず、両預言書には共通するものが見いだされている。それを後代の編集者の加筆とみなす必然性もない。

・日課箇所を含む15～19章は、「ぶどうの木」のたとえを軸にしてイスラエルの罪過ある姿を追求する預言が多様に繰り出されている部分で、その中にある日課箇所の18章は、神に問われる罪の責任の所在が個人にあることを示し、各人が罪を自覚し悔い改めて立ち帰るように促している。日課箇所に限ってみると、罪の自覚を問われているのは「イスラエルの家」という共同体・集団に対してであるような印象も与えるが、これは、前提として人々が集団的・共同体的発想を強く持っていたことと関連する。端的に、18章冒頭には、「先祖が酸いぶどうを食べれば、子孫の歯が浮く」ということわざが流布していたことが示されている(同じことわざがエレミヤ 31:29でも引用されている)が、現実社会の実感として「親の因果が子に報い」と受けとめられることは普遍的なこと。それに対して、正典「律法」では、「十戒」で「わたしを否む者には、父祖の罪を子孫に三代、四代まで問う」(出 20:5、申 5:9)という戒めがある一方で、「(主は)御自分を否む者にはめいめいに報いて滅ぼされる」(申 7:10)とも示されてお

り、必ずしも一貫性がない。「子孫に三代、四代まで」と言われる場合には、現に神を否んだ者と同時代を生きた世代に同じ傾向を与える影響が見られることから指摘されているのだ、とする解釈もあるが、必ずしも釈然としない。おそらく、王国時代には一定の共同体的社会が曲がりなりにも成り立っており、集団的連帯性が当然のこととして意識されていたのに対して、バビロニアによる支配・捕囚、王国滅亡に伴って共同体的ユダヤ社会が解体されるのに伴い、問題をより個人レベルまで突き詰めて問い、神学的思索が深められるようになったのだろう。日課箇所では、「主の道は正しくない」と主張する人々があることが取り上げられているが、これは、まさに共同体が解体され個人化されたときに、「なぜ親の因果の報いを子が引き受けなければならないのか。それを求める主であるならば、そのような主の道は間違っている」という理屈から出てきたものであろう。エゼキエルは、そのような時代の要請する問いに神学的に答えようとしているのである。その意味で、ユダヤ正典がバビロン捕囚後に構想する宗教共同体も、単に以前の自然的共同体の再興としてではなく、個人化された者たちを再結集させる共同体として構想された側面があることは無視できない。

使徒書日課(使徒 17章より)

・「使徒言行録」の緒論については、資料「聖書と祈りの会 210519」などを参照。

・日課箇所は、使徒パウロのアテネ伝道の様子を伝える一部。「使徒言行録」は、回心後に隠棲していたパウロがバルナバに見出だされてアンティオキア教会に加えられ、そこからバルナバを長とする宣教団に参加するようになったことを伝えている。当初、パウロはバルナバの宣教団の一員であったが、異邦人伝道問題を整理した「エルサレム教会会議」(15章)を経て、バルナバと袂を分かち、独自の宣教団を組織して伝道活動を展開した。その活動地は、エーゲ海を挟んで、西岸のギリシア諸都市(フィリピ、テサロニケ、コリントなど)と東岸側のアジア州諸都市(エフェソ、コロサイなど)であったと考えられる。アテネ伝道は、コリント伝道に先立って行われたが、目立った成果を上げられなかったと推察される。

・アテネは、ギリシア諸都市の中でも古典古代時代には盟主の地位にあった都市で、長く哲学者たちの文化的中心とみなされてきた。アレオパゴスは、古典古代時代にアテネ貴族政治の中心会議(アレオパゴス会議)が置かれた場所で、この政治会議体(自治組織)はローマ支配時代まで存続したとみられているが、紀元1世紀に機能していたかどうかは不明。

・日課箇所の前段部によれば、パウロの「イエスと復活についての福音」に人々に関心を持ったとされているが、おそらく「イエス(イエスス)と復活(アナスタシス)」を未知の神々の名と認識していた。そこで、「死者の復活」と聞かされて拒絶したのだろう。

福音書日課(マタイ3章より)

・日課箇所は、「マタイ福音書」の序章(降誕物語)に続く本編の冒頭で、他の福音書と並行する「洗礼者ヨハネの宣教」伝承を物語る箇所。基本的には「マルコ福音書」の伝承物語に類似するが、「ルカ福音書」との共通点もあり、いくつかの伝承をもとに編集しているものと考えられる。「洗礼者ヨハネ」については、同時代のユダヤ人史家ヨセフス著『ユダヤ古代誌』にも言及がある。

・「洗礼者ヨハネ」伝承において最も重要とみなされたのは、イザヤ書(40:3)を典拠とするヨハネ理解で、四福音書は物語り方に違いはあっても共通してこれに触れている。これは、ヨハネの悔い改めを呼びかける宣教内容に関連して述べられることであるが、具体的にヨハネがどのような言葉で宣教したのかについては、各福音書で相違がある。「マタイ福音書」は、他の福音書が伝えない宣教の言葉として、「悔い改めよ。天の国は近づいた」を加えているが、これは明らかに、主イエスの宣教の言葉との連続性を明示することを意図したものである(4:17 参照)。他の福音書では、洗礼者ヨハネを主イエスの先駆者として位置づけながら、むしろ両者の差異や断絶性を強調する傾向にあるが、「マタイ福音書」は、「預言の実現」の定型表現に見られるように「旧約」との連続性を明示する傾向にあり、洗礼者ヨハネの宣教を主イエスが継承したのだと積極的に位置づけようとしているのだろう。

・ヨハネの授けていた洗礼は、「悔い改めの洗礼」とも呼ばれ、「罪の告白」をした者に与えられるしるしとして行われていた。つまり、人間の「罪の告白」に焦点が当てられていた。これに対して、主イエスは「聖霊(と火)で洗礼を授ける」(3:11)と言われるように、神の「聖霊授与」に焦点が当てられたものと解された。

来週の誕生日 (6月6日～12日)**主日礼拝の讃美歌から**

・21-127 番「み恵みあふれる」は、19世紀フィンランド・ルーテル教会信徒でフィンランド文学の教授クロンが自らも携わった讃美歌集に収録した讃美歌。曲は、フィンランドの伝統旋律から採られた。WCCの1974年版讃美歌集に採用されて広まった。

・21-425 番「こすずめも、くじらも」は、1983年、米国ミズーリ州のコンコーディア・ルーテル教会の設立110周年記念のために新しく作られ(作詞作曲は82番「今ここに」と同じコンビ)、後に諸教派の讃美歌集に採用された。

・21-402 番「いともとうとき」(= I 502 番)は、19世紀英国人で福音唱歌作家として信徒伝道活動に励んだキャサリン・ハーンの作詞。曲は、同時代に米国で大衆伝道に携わり多くの福音唱歌を作曲した音楽家ウィリアム・フィッシャーの作曲。大衆伝道運動の中で広く歌われてきた。

21-127「み恵みあふれる」**Herrasta Veissa Kieleni****English Translation****O sing my soul, your Maker's praise**

1. O sing my soul, your Maker's praise / In grateful hymns ascending; / Whose steadfast love has crowned your days / With heav'nly gifts un ending. / I sought the Lord, He heard my cry; / His holy angels hover nigh / The tents of those who love Him.
2. The Lord is good to those who seek / His face in time of sorrow, / Providing comfort to the weak / And grace for each tomorrow. / Though grief may tarry for a night, / The morn shall break in joy and light / With blessings from His presence.
3. The Lord will turn His face in peace / When troubled souls draw near Him; / His loving kindness shall not cease / To those who trust and fear Him. / Our God will not forsake His own; / Eternal is His heav'nly throne; His kingdom stands forever.

21-425「こすずめも、くじらも」**God of the Sparrow**

1. God of the sparrow / God of the whale / God of the swirling stars / How does the creature say Awe / How does the creature say Praise
2. God of the earthquake / God of the storm / God of the trumpet blast / How does the creature cry Woe / How does the creature cry Save
3. God of the rainbow / God of the cross / God of the empty grave / How does the creature say Grace / How does the creature say Thanks
4. God of the hungry / God of the sick / God of the prodigal / How does the creature say Care / How does the creature say Life
5. God of the neighbour / God of the foe / God of the pruning hook / How does the creature say Love / How does the creature say Peace
6. God of the ages / God near at hand / God of the loving heart / How do your children say Joy / How do your children say Home

21-402「いともとうとき」**I Love to Tell the Story**

1. I love to tell the story of unseen things above, / Of Jesus and His glory, of Jesus and His love; / I love to tell the story, because I know 'tis true, / It satisfies my longings as nothing else would do.

Refrain:

- I love to tell the story, 'Twill be my theme in glory, / To tell the old, old story. Of Jesus and His love.
- I love to tell the story, more wonderful it seems / Than all the golden fancies of all our golden dreams; / I love to tell the story, it did so much for me, / And that is just the reason I tell it now to thee.
- I love to tell the story, 'tis pleasant to repeat, / What seems each time I tell it more wonderfully sweet; / I love to tell the story, for some have never heard / The message of salvation from God's own holy Word.
- I love to tell the story, for those who know it best / Seem hungering and thirsting to hear it like the rest; / And when in scenes of glory I sing the new, new song, / 'Twill be the old, old story that I have loved so long.